モアイの島の最高峰 507m

古谷眞之助

以下は、1999 年から 2003 年までメキシコで勤務していた時、イースター島を一人旅した際の旅行記「イースター島紀行」からの抜粋です。抜粋したため、文章のつながりが少しおかしいのはご容赦下さい。全文読んでみたいと思われる方がおられましたら、古谷宛（ shin−cas@c−able.ne.jp ）ご連絡下さい。

少しうとうとしていたらしい。機内アナウンスがあって、ランチリ航空 833 便が徐々に高度を下げると、群青色の海に島影がちらと見えた。隣席となったスコットランド人、トーマスが身を反らせて外を見やすくしてくれ、機外を指差す。イースター島だ。ランチリ機は滑走路を左手に見ながら一旦島を横切り、その後大きく左旋回してファイナルアプローチに入った。眼下の海が美しい。海岸線は切り立った崖が続いているらしく、白い飛沫がいたるところに見える。B767 はエンジンを徐々に絞って、イースター島マタベリ空港のランウェイ 10 に滑らかに着陸した。

今から 40 年前、当時小学４年生だった私に叔母が贈ってくれた一冊の本が、この島に興味を持つきっかけとなった。トール･ヘイエルダール著「コンチキ号漂流記」である。彼はノルウェーの人類学者であり、自説のポリネシアン南米起源説を証明するために、バルサ筏コンチキ号に乗ってペルーを出発し、102 日間の漂流を経て南太平洋のプカプカ島にたどり着いている。目標の一つに考えていたイースター島にはたどり着くことはできなかったものの、自説の可能性を証明することになり、一躍脚光を浴びることになった。ただし、南米起源説は、他説がその後に有力な証拠を持つに到って、現在ではほとんど省みられて

いないと言う。しかし、この実験漂流によってイースター島は全世界に知られるところとなり、それがひいては、これといった産業のない島に「観光」という一大産業をもたらす結果となった。島における学術的研究成果とともに、彼のこの貢献に対して島民あげて感謝しているらしい。そのため、彼が来島する際には、いつも VIP 扱いだったとも言う。

日本から約 15,000km、チリのサンチアゴから 3,760km、タヒチから 4,050km、一番近い人の住む島、英領ピトケアン島からでも約 2,000km を隔てた絶海の孤島、それがこの島、イースター島である。北端のハワイ諸島、西端のニュージーランド、そして東端のこの島を結ぶ三角形はポリネシアン・トライアングルと呼ばれ、この範囲にかつては卓越した航海術を誇ったポリネシアンが住んでいる。チリでの正式名称は「Isla de Pascua」。意味は同じく「復活祭の島」である。もっとも、この島の住人は自らをラパ・ヌイ人と称しており、彼らにとってみれば島の名もポリネシア語の同じラパ·ヌイ（Rapa Nui）である。

島は、南緯 27 度 9 分、西経 109 度 23 分に位置し、周囲約 60km、面積 166k㎡、最高峰マウンガ・テレヴァカ 507mを頂点として、両脇にポイケ 352m とラノ・カウ 324m のカルデラを従える形で綺麗な二等辺三角形をした火山島である。島内にはその他にも円錐火山があちこちに見られ、総数 100 以上もある。地図帳を広げて見ると、南東太平洋地域に、ぽつんとイースター島が記載されている。東太平洋海嶺の中心辺りだ。約３百万年前から 4 千年前までの間に、3 回におよぶ海底火山の噴火によって形成された島だと言う。気候は海洋性亜熱帯気候で、平均気温 20.7 度、降雨量は 1,126mm。人口は 3,500 人、その 70%がラパ・ヌイ人。産業は観光業を中心とし、農漁業は細々と行われている。大型船の接岸できる港は一切無く、重量物は 2～3 ヶ月毎に大型船で運び、ハシケによって荷揚げしている。島の約半分は国立公園に指定されていて、1995 年にはユネスコの世界遺産に認定された……。

帰国も決まった 2002 年末、クリスマス休暇 9 日間の総てを使い切って、憧れのこの島に行って来た。私にこの島に関心を抱かせることになったトール・ヘイエルダールが昨年４月 18 日に亡くなっていたことを知ったのは、恥ずかしいことに、イースター島に着いてからのことだった。

私の住むレオンからの道程は以下のようになる。もちろん、いずれも空路である。

レオン→メキシコシティ　約　1時間　　211nm

シティ→サンチアゴ　　約 13 時間　6,589nm

サンチアゴ→イースター　約　8時間　3,750nm　　合計 10,550nm=19,539km。

シティで約 5 時間の待ち時間、サンチアゴでは 9 時間の乗換え待ち。12 月 24 日の午後 2 時にレオンを発ち、イースター島に到着したのは、12 月 25 日午後 9 時前だった。復路はもっと悲惨で、12 月 30 日午後にイースターを発ち、サンチアゴで一泊、シティで一泊を強いられ、レオン到着は年も明けた 1 月 1 日のお昼前である。そういうわけで、9 日の休暇のうち、実に半分以上を移動に費やし、滞在はわずかに 4 日。こういう旅は初めてだったが、それでも行ってみたい島、それがイースターだった。

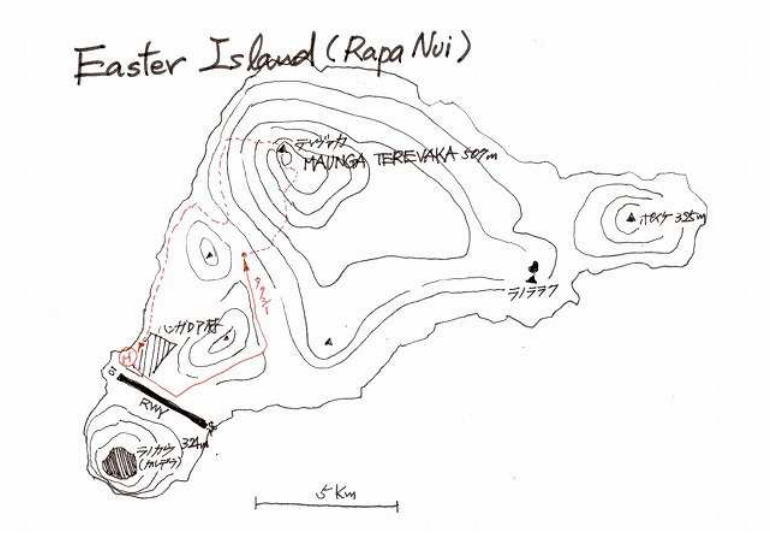
立派な滑走路とは裏腹に、ここにはボーディングブリッジもなく、タラップが延びてきて、それを降りる。潮の香が鼻腔をつく。現地時刻は午後 9 時前なのだがまだ薄明るく、ゲートをくぐると予約していたホテルのバンが迎えに来てくれていた。5 分でホテルに到着。チェックインし、部屋の設備を確かめる。エアコンの効きは十分、広さもまぁこんなものだろう。お湯はしっかり出た。さっそく熱い風呂にたっぷりつかった。時差の関係はもう思い出すのも嫌だが、ともかく、24 日午後 2 時にレオンを出て、25 日午後 9 時に到着したのだ。31 時間。その時間に、改めて遠い島に来たと実感する。ロビーに缶ビールを買いに行ってそれを飲み干すと、さすがに疲れたのだろう、明日の予定を考える間もなく、深い眠りに落ちた。

マウンガ・テレヴァカに登る　　200212.29

タクシーは、やはり 8 時には来なかった。ロビーに居合わせた M さんがタクシー会社に電話を掛けてくれたが、交渉は不首尾で、あと 30 分かかるとのことだった。M さんは申し訳ありません、と丁寧に詫び、絶対に値切りますから、と息巻いた。海外でも日本人の時間感覚を失わず、しかも律儀である。いや、そんなに急いでいるわけでもありませんから、と言うと、彼女はかえって恐縮してもう一度詫びた。

予定通り、30 分遅れてタクシーが到着した。M さんはつかつかとタクシーに駆け寄り、運転手と何か話している。私はかなり重たいザックを肩に乗り込んだ。M さんが「料金は 5,000 ペソですから、チップ込みです、それ以上は不用ですからね」因みに、チリ・ペソは、1 ペソ 1 円ほどの交換レートである。

タクシーは相当年季の入ったオンボロで、その上運転手はどう見てもプロの運転手とは思えないお兄ちゃん。運転振りがぎこちなく、不意にガソリンスタンドに寄っていいかと聞く。ガス欠はご免だし「もちろん」と言うと、何となく安心した風である。どうなっているのだろう。島内唯一のガソリンスタンドで給油。その時教会の鐘の音が聞こえてきて、はたと思い当たった。たぶん今は、ちょうど日曜礼拝にみんなが集まる時刻なのだ。このお兄ちゃんは敬虔なタクシードライバーの息子か、知合いなのだろう。きっとそのプロが



彼に頼んだに違いない。

フロントガラスがめちゃくちゃ汚れているので、ワイパーを使ってくれ、とお願いしたが、彼は、ノー、ノーを繰返すばかり。50キロ以上は出ないようだし、時折どこからか異音が聞こえてくる。ワイパーもダメ、もちろん距離メーターなどない。そんなタクシーは、人気のない朝の未舗装道をトロトロ走った。

ちょうど30分で登山口に着く。お兄ちゃんドライバーもほっとした様子だったが、私自身が一番ほっとしていた。あとは自分の足で歩くだけだ。M さんには悪いが、日曜礼拝をさぼらせたに違いない彼に申し訳なく思い、500ペソをチップとして払ってタクシーを降りた。お兄ちゃんドライバーは、やはりぎこちなく車を切り返して向きを変え、それでも片手を上げて挨拶して走り去って行った。背後にもうもうと砂煙を上げている。私は煙草を咥えてその様を見守っていた。何となく危なっかしく心配をしていたのだが、やがて小さな峠を越えてタクシーは視界から消え去った。今からでも礼拝には十分間に合うだろう。

さて、ひとりになって膝と踵とアキレス腱を入念に揉みほぐす。何せ登山はもう何年ぶりかなのである。そうして柔軟体操をしながら、目で今から登るルートを辿る。ガイド女史の話では山頂までは 3 時間。なだらかな斜面をゆっくり登って行けばよい。あのユーカリの森を越えれば、視界を遮るものもない。持参した地図を見る。標高差を確認して、ざっと 2 時間もあれば十分と見当をつけた。運動靴のヒモをきつく縛り直し、手帳に「0910 アフ・アキビ登山口発」と書いて歩き出した。

空には一点の雲もない。たぶんジムニーが付けたと思われる轍のある山道を快調に歩く。牧草地はまだ朝露をたっぷり含んでいて、名も知らぬ草が可憐な花を咲かせている。これに小川のせせらぎ、小鳥の囀りがあれば、それはもう日本での低山徘徊そのものなのだが……。「アルプスの少女・ハイジ」のテーマ音楽を口ずさむ。昔からの癖だ。久し振りなのに、この歌のヨーデル部分の裏声が、なぜか今日は綺麗に決まって嬉しくなった。10年前くらいまで、家族でどこかに出掛

ける時には、いつもこの歌を歌っていた。かつての我が家のテーマソングである。一所懸命歌っていた娘らももう大学生。変な感傷にとらわれながら、それでもひとり歌い続けた。「ヨーローローロ、レヒッホー、レヒッホロ、レヒッホー、口笛はなぜ遠くまで聞こえるの、やまびこはなぜ私を呼んでいるの、教えて、おじいさん……」あれっ、歌詞が違ったかなァ、まぁいいか。

しばらく歩くと、ガイド女史の指摘通り道が二手に分かれ、左手はユーカリの森に延び、右手は山斜面に延びていた。迷うことなく右手に道を取る。少し汗ばんできた。30 分経過してちょっと早いが小休止。道端の大きなユーカリの木の下に腰を下ろし、煙草に火を点ける。木陰はひんやりとしていて、汗が引いて行くのが分かる。この感じが好きなのである。そこはちょうど「谷」の部分に当たり、おそらく雨季には小さな水系ができるのではないかと思われた。もちろん今はカラカラで、その片鱗さえ伺えない。地図を広げ、現在地を記入する。もう３分の１は来ている。意外に早く山頂に立てるだろう。「0930 大きなユーカリの木の下に到着、0940 出発」と手帳に記入して歩き始めた。ザックは水でかなり重いが、久し振りにザックを本来のザックとして機能させている。その、肩に来る重量感がむしろ心地良い。

なだらかな一つの丘を登り切ると、前方に馬が数十頭見えた。辺り一帯、視界の届く限り柵は見えないから、随分と広い放牧地に放し飼いにされていることになる。ガイド女史は憤慨していたが、阿蘇の草千里を思わせるなだらかな牧草地に馬が草を食んでいる光景は実に様になっている。美ヶ原や久住高原を思い出した。

道はその馬の一群の方向に延びている。そのまま道を辿ると、馬の一群はぞろぞろと私の方へ近寄ってきて、道を占領する形で道を遮ってしまった。近くで見る馬体はやはり大きい。道端の草を食みながら、時折侵入者への警戒なのか、頭をもたげてブルルと鳴く。子馬も数頭いる。立ち止まって様子を見るが、一向に移動する気配はない。しかたなく、道を離れて遠回りしてやり過ごした。そしてしばらく道を進んで振り返ると、その頃になってまたぞろぞろと移動を始めていた。水はどこにあるのだろう、とふと思った。

ゆるやかな尾根に出た。そこからは一昨日訪れたアフ・トンガリキやラノ・ララクが東方向に望め、背後の南には先ほどからずっとラノ・カウも見えている。そのまま稜線伝いに西へルートを取り、山頂へ向かう。地図を見ると山頂付近にはいくつかの噴火口があり、かなり複雑になっている。山頂付近を眺めても、ピークの中のどれが山頂とはまだ特定できない。西風が山の斜面に沿って吹き上がってきて、稜線を歩くのは実に爽快だ。相変らず空には一点の雲も……と上空を見上げると、島上空に綺麗に積雲の連なりができている。すでに陽も高くなっており、対流が始まったのだろう。

山頂付近のいくつかのピークへは、それぞれジムニーの轍が延びていた。誰もピークには登りたいのはやまやまだが、これではどれが山頂か余計に分からない。目星をつけて一つを選んで登り続けた。そのピークから周囲を見回してみた。どうも、さらに奥にあるピークの方が高い気がする。地図は日本の地形図のように正確ではないから、特定できないのである。それに、ここには山頂に「〇〇山山頂、標高〇〇m」などという標識を立てるおせっかいもいないようだ。奥のピーク　まで行き、先ほどのピークを振り返る。やはり、最初のピークが高いと決めた。しかし、ほとんど高度差はないようだ。

（樹木の少ないイースター島の山頂にたった一本の木があるのが印象的だった）

そこからは、ツアーでは行っていない島の西側が綺麗に見下ろせた。ザックを降ろしてしばらく眺めを楽しんだ。島の西側には舗装路は一切なく、ランドクルザーでなければ走行は無理と M さんが言っていたが、確かにそのように見えた。なだらかな丘陵地帯がずっと続いており、無数の噴火口がそれに変化をつけている。人家は一切見えない。そして太陽に輝く広大な海。そのピークで体を 360 度回転させても、当たり前だが、ずっと水平線が続いているだけである。しかし、この海を見たかったのだ。私は面白がって、2 度 3 度とダンサーのように体を回転させた。海、海、海……。かつて屋久島の最高峰、宮之浦岳に登ったことがある。もちろんそこから見る周囲も海だらけだった。だが、ここの海は周囲 2,000km には一切陸地はないのである。不思議と言えば不思議。今、自分は東太平洋海嶺の最高峰に立っている。標高 525 m。しかし、海嶺の底からは一体どれくらいの高度差があるのだろう。

勝手に最高峰と決め込んだピークに引き返した。時計を見ると 1030。登山口から 1 時

間半だ。まだまだ脚力の衰えていないことに満足してザックを降ろし、靴を脱ぎ、汗をぬぐって水を飲んだ。水が体にどくどくと吸収されて行く。ビールを持ってくるべきだったかな、とも思う。煙草に火を点けた。絶景を前にしての一服は、誰が何と言おうと、最高に最高なのだ。このために山に登っているとも言える。煙草を 2 本吸い終えるまで、じっと周囲を眺め回す。その一瞬一瞬が満足だ。二度目に視線をやれば、必ずまた新たな発見がある。

島の地形を特徴付けている無数の火山の噴火口、意外に樹木の多い村の周辺、村を除けばほぼ島全体を覆い尽くす草原、溶岩の流れ出たと思われる方向、雨季に形成されるであろう水系、偏西風が強く吹く時の島を吹き抜ける風の流れ、農耕地の分布と利用度、地図通りに二等辺三角形を為す島形……。

誰もいない山頂で、目に見える現在を確かめ、遠い過去を想像するのは実に楽しく愉快だ。7 名の戦士たちの大型カヌーが砂浜に到着した光景を思い描いてみる。そしてホツ・マツア王の上陸。彼らはどれくらいの大きさのカヌーでやってきたのだろう。どのような格好をしていたのだろう。王様のお后はどれくらいの美人だったのだろう。モアイが盛んに作られていた頃、島は森に覆われていたと言う。目に見える丘や山や耕作地に森林を置いてみる。その森に 1 本の道が見える。多くの人々に引かれて、モアイがゆっくりと移動して行く。そうかと思えば、あちこちの集落で部族間の戦いが繰り広げられている。家々が燃え、モアイが倒される。勝利の雄叫びが風に乗って聞こえてくる。そしてまた、沖に一艘の帆船も見える。ボートが降ろされ、その先端に立つ神父は十字架を握り締め、硬い表情をしている。海岸でそれを見守るラパ・ヌイの人々……。

それにしても、眼前に広がる光景は見事としか言いようがない。やはりここは、スケッチで自分の印象を留めておくべきだろう。360 度の水平線が最も印象的なのだが、これをスケッチするにはピカソの天才が必要だ。それで、おとなしく、ここまで登ってきたルートを取り入れ、遠くにハンガ・ロアの村、さらにその奥にラノ・カウを取り込むという構図で描き始めた。是非見下ろす感じを正確に描きたい。そよ吹く風の感じが取り入れられないだろうか。空の蒼と海の藍も綺麗に表現したい。意欲はあるのだが、テクニックがついて来ない。結局いつもの調子で描く。

そろそろ仕上げという頃になると、不思議と誰かが来る。今回はジムニーに乗ったフラ

ンス人一家だった。私が 1 時間半かけて登ってきた道を彼らはどれくらいで来たのだろうか。一家の主が車を降りて近寄って来た。その時はまだ彼らが何人か分からないから、とりあえずスペイン語で「オラッ」と挨拶する。彼が尋ねた。英語は分かるか？どうにかね。

（マウンガ・テレヴァカ山頂から。岬のすぐ手前に白く伸びているのが滑走路）

フランス語はどうだ？全くダメ。彼は残念そうに、そうか、と言って、それ以上は話さなかった。たぶん彼も英語は得意ではないのだろう。ただ、自分のスケッチを覗き込んで、へぇーっ、といった風な表情で、短く「グッド！」とだけ言った。彼は年頃の娘と夫人同伴で、遠目に娘はスタイル良く美人に見えたが、残念なことに娘はそのまま車を離れずに、母親としきりに何か話しており、やがて一家は元来た道を引き返して行った。

そろそろお昼前である。何とか満足の行く絵になって筆を置くと急に腹が減ってきた。持参のクッキーやレモンなどを広げる。レモンをペットボトルに絞って注ぐと、生温い水がキリリと締まって来る。学生時代の山登りで覚えたとっておきの秘術である。空腹を満たし喉を潤して大の字に寝転んだ。空に積雲の連なりが見える。この斜面風を利用すれば、あの積雲まで到達できるだろうなぁ。斜面風はかなり強力だし、着陸できる場所は何箇所

かある。ぼけーっと、ここでグライダーを飛ばせられないものか考えていた。そんないつもの思考パターンに入ってしまうと、やがて、草いきれと吹き上げてくる風に包まれて、しばらく眠ったようだった。

帰りのルートが往路と同じでは面白くない。山頂から草原状の西斜面を見下ろし、目でルートを追ってみる。踏み跡はないにしても十分下ることができると判断した。大丈夫だ。手帳に「下山開始 1245、地図にはない西ルートを下る」と記す。幾分か軽くなった荷物を担いで尾根伝いに下山を始めた。

西側斜面はずっと草原が続いており、予想通り歩くのには何の支障もない。ただ、斜面が急で少しばかりジグザグに降りてゆく。状況によっては尾根を下り谷側を下る。中腹まで来ると、全島を一周するトレイルがうっすらと見えてきた。そしてその道伝いに大きなユーカリも樹も見えた。そのあたりには、放し飼いにされた牛か馬も群れている。

1 時間弱でトレッキングロードに到着した。このトレッキング道は 3 合目辺りに作られており、ほぼ水平道と言ってよいようだ。道幅はほんの 50cm ほどだが、両サイドはかなり平らにされており、ジムニーを強引に通せないこともないだろう。ただ、ここにははっきりした轍はなかったから、もっと別の道が海岸線近くにあるのかも知れない。

しばらくそのトレッキング道を進むと、今度は立派な角を持った一頭の雄牛が道を占領していた。わずか 50cm の道をまるで関所の番人のように守っているのである。馬の時同様に迂回してやり過ごそうとすると、あの大きな目でじっとこちらの動きを追ってくる。まさか暴れ牛ではあるまいが、ちょっと怖くなって一旦道を引き返し、ずっと手前から山側に登り、大きく迂回してから元のトレッキング道に戻った。その間も、もし走り寄って来たら、あの岩陰に逃げようとか、ザックを置いて斜面を駆け上がろうとか、そんなことを考えるほどだった。振り返ると、その牛は山の中腹にたむろする仲間の方へ向かっており、私の方を向いて勝利の雄叫びのつもりなのか、モォォォーと大きな声を上げた。

このトレッキングロードは実に快適である。左手斜面を振り仰げばマウンガ・テレヴァカの頂きが望め、右手下方には、海岸線と深い藍の海。海は近くに来ると一段とその藍色の深みを増して来ている。右頬を常に海から吹き上げてくる風が撫で、ほとんど水平の道ではそれほど疲れもしない。

突然、上空にけたたましい鳴き声が聞こえたかと思うと、何かが自分目掛けて急降下してきた。私はとっさに身をかがめた。何か? じっと目を凝らして眩しい上空を見上げる。と、その物体はまたも自分を目掛けてまっさかさまに向かって来る。今度はしっかり見届けた。それは紛れもなく鷹だった。まるで第二次大戦の記録映画で見る急降下爆撃機のように、上空から意を決して突っ込んで来、上空 5m くらいで引き起こして、また上空に一

旦退避する。そして目標物が攻撃にひるむことなくそのまま移動を続けていると見るや、再度の攻撃を仕掛けてくるのである。鷹とは、こうも好戦的なのだろうか。鷹には縄張りがあって、珍入者に対してこうもしつこい波状攻撃を繰返す性質を持っているのだろうか。鷹はメキシコでも簡単に見られるが、こんな鷹にはお目にかかったことはない。逃げるが勝ち、とばかりに近くにあったユーカリの大樹の下に逃げ込んだ。

しかし、そこはもっと状況が悪かった。大樹の裏側には、強い日差しを避けて牛が一頭憩っており、突然私が走り込んだものだから、びっくりして走り去ったのである。こちらは全く牛に気づいておらずもっとびっくりした。下手をすると反撃されていたかも知れない。しかも、その鷹は、ユーカリに逃げ込んだ私に引き続き執拗な攻撃を繰返してくる。どうしたものか。私は樹間から、攻撃してくる鷹を確認して警戒を怠らなかったが、そのうち、はたと気づいた。もしかすると、このユーカリの樹にあの鷹の巣があるのではないか。きっとそうだろう。あの鷹はオスの鷹で、今樹上ではメスの鷹が卵を抱いてじっとしているに違いない。

私はトレッキング道の先にあるもう一本のユーカリの下に逃げ込んだ。やはり私の予想は当たっていたようで、鷹はもう攻撃してこなかった。そこには牛もいなかった。ほっとしてザックを降ろし、休憩することにした。日差しはすでに相当強く、木陰には涼やかな風が吹き抜けて快適だった。海を眺め、その海があまりに素晴らしいものだから、手帳に簡単にスケッチする。そして手帳に記す。「1355、鷹の攻撃を受け、ユーカリの樹に逃げ込む。1410 出発」

そこからは水平道ではなくなった。それほど急な上り下りではないが、それでも久し振りの山行で足に疲れと痛みを感じ始めていた。そこから 1 時間近くかけて昨日訪れた洞窟農園入口まで到着した時にはほっとするとともに、大休憩が必要と思った。しかし、そこまで下るともうユーカリの樹は周囲にはなく、しかたなく無舗装の観光道そばの小さな樹の小さな木陰に腰を降ろした。洞窟のひんやりした内部を思い浮かべはしたが、とてもそこまで歩く気が起らなかった。水を飲み、キャンディーを口に入れて煙草を吸う。

しばらく休んでいると、再び歩き出すには勇気と気合が必要だが、昔の自分なら次に見えてくる光景を思うだけで簡単に払拭できたのに、もうそうはいかない。時折ジムニーがもうもうと砂煙を立てて通り過ぎて行く。助手席の女性が、何をしているのか、と怪訝な顔をしているのが一瞬見えた。しかし、止まってはくれない。止まって欲しい、と正直思った。それくらいに疲れていると自覚して、ちょっとがっくり来た。仕方なく地図を広げてルートを確認する。ここからまず海岸

線に出て、その後海岸沿いに道はうねうねと続いている。ざっと距離を測ってみると 10 ㎞はないが、ほぼそれに近い距離。太陽は中天を過ぎて今一番力がある時である。水を飲んだ。2 リットルの水がほとんど底をついている。ま、あと 1 リットルあるから心配ないさ、とその時はそういう気持ちでガブガブ飲んだ。「1440 洞窟農園入口着。さすがに疲れてきた。大休止。1500 発」と記して重い腰を上げた。

万一のためにと思って用意した 1 リットルの水を持参しなかったら、完璧に参ってホテルまでたどり着けなかったかも知れない。そこからの道は、今思い出すだけでもウンザリだ。海岸近くは溶岩が剥き出しになっており、所々に草が生えているだけで、樹木と呼べるものは一切ない。つまり日陰がないのである。足がさらに痛んできて、そのことが気力を萎えさせる。道はどこまでもうねうねと屈曲し、細かいアップダウンが続く。唯一の救いは、潮風が吹き続けていることくらいだ。

ダイビングスポットとして有名な場所まで何とかたどり着いた。断崖絶壁の先にほんの小さな岩の島があり、そこが絶好のスポットになっていると観光案内にあった。看板があり、車が 2 台駐車していた。完全にバテている自分を感じ、また大休止が必要と思う。その岬の突端までとぼとぼ歩き、砕ける波を見下ろせる場所まで来て、ザックを放り投げた。どかっと崩れるように岩のひとつに腰を降ろした。しばらくの間、煙草を吸うのも忘れてボーっとしていた。

岩陰に日陰でもないかと辺りを見回すが、こうも太陽が高いとそれも望めない。タオルを取り出し、日本帝国陸軍兵のように頭から冠って首筋に垂らす。白いタオルは太陽光も反射してくれるだろう。眼下の海では数人がスキューバダイビングを楽しんでいる。海の中

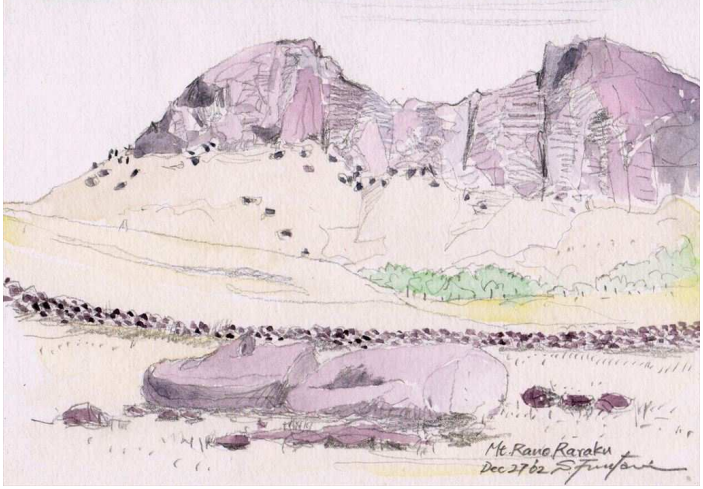
は涼しいのだろうなぁ。1 リットルの水に手をつけた。もうレモンはないからキリリとした味は楽しめず、ただ生ぬるい水が喉を通って行くだけだ。

しかし、幾分か落ち着いてきた。煙草に火をつけ村の方向を見るが、まだハンガ・ロアの村は視界に入って来ない。地図を広げて距離を見ると、あと 1 時間はかかる距離だ。もう休みたいだけ休むことにしよう。そう思うと少し楽になった。手帳に無意識に辺りの風景を描いて行く。こういうさりげなく描いたものが結構上手く行く時があるが、この時もそうだった。手帳は 10cm 四方くらいの小さなものだから、描くには時間もかからない。それでいて、なかなか味のあるものが描けた。この「いたずら描き」にも等しいスケッチは今、写真と一緒にアルバムの中に収めてある。それを今眺めても、とてもあの時の疲れ切った感じとはほど遠い、結構細密な観察が見て取れるから不思議なものである。

「1530 ダイビングスポット着。大休止。スケッチ一枚。1600 出発」と手帳に記し、あと 1 時間頑張るぞ、と気合を入れて歩き始めた。一気にホテルまでたどり着く覚悟だった。しかし、それは無理で、やはりもう一度小休止を強いられた。昨日訪れたアフ·タハイの小公園で休む。しかし、ここまで来れば、もうホテルは直ぐそこである。陽が少しだけ傾いてきて、幾分か柔らかさを含んできている。公園の一番高いところで、焦点も定めず、ぼんやり海を眺めていた。その時、ふと思い当たったことがある。

イースター島と言えば、ムー大陸伝説。しかし、ここまでのところムー大陸に関連した説明は、仮説・俗説にせよ一切なかった。ホテルで借用した本にも記載はなかった。これはどういうことだろうか。俗説によれば、イースター島は太平洋に沈んだムー大陸の最高峰ということではなかったか。ムー帝国であればこそ、多くの人が住み、文明があり、技術があり、あのモアイ像も作ることができた、というものだ。もちろん、学問的には完全に否定されているのだろうが、例えば私なら、これを観光資源にすることくらい簡単に思いつくし、あくまで伝説と断れば、特段問題はないだろう。現に日本国内にしろ、また海外のどこででも、この種の伝説を活用した観光地はゴマンとあるのである。ムー大陸ツアー、ムー・ティーシャツなんて、案外当たるかも知れない。

これは、インターネットで調べている時に、ある日本人観光客が「アフ·タハイにある石で綺麗に作り上げられた船着場を見て、ムー大陸への入口のような気がした」と書いてい

たのを思い出したからである。私には、とてもそれが「当時の聖地で、天に聳えていたであろう、マウンガ・テレヴァカの祭壇へと続く階段の一部」とは思えなかった。ただ、モアイとムーを結びつける伝説のひとつやふたつあったても困らないだろうに、とそんなことを思ったのである。

最後の休憩を終え、最後の２㎞を歩く。そしてホテル 1720 到着。さっそくロビーで販売しているスプライトを買って一気に飲み干し、部屋に駆け込んで熱いシャワーを長い時間浴びた。とても立っておれないからバスタオルを床に敷き、まるで滝に打たれる行者の姿そのものである。その後ベッドに横たわり、地図を広げて今日の行程を辿ってみた。歩き始めたのが 0910。ホテル到着が 1720。その間、８時間 10 分。実質歩行時間約５時間。歩行距離はざっと 20 ㎞にはなるだろう。地図にはない下山路を赤ペンで入れ込み、もう一度眺めた。うーん、20 ㎞でダウンか、という情けない思いが込み上げてくる。かつては山口県の萩市から宇部市までの80㎞を16 時間で走破したことがあるのに‥‥‥。しかし、考え方を変えれば、50 歳になろうとする自分に、まだこれだけの頑張りが残っていると言えなくもない。何とも言いようのない曖昧な思いにとらわれながら目を閉じると、そのまま２時間ぐっすり眠ってしまった。（ 終 ）